

2012 ルール改正について

2009年10月、ベネズエラ・マルガリータ島で第24回 I S F（国際ソフトボール連盟）総会が開催され、その専門委員会の一つであるルール委員会では、43のルール改正案をこの席上で承認。2010年1月1日から、この新たな I S F ルールが施行され、そのルールに基づいて競技が実施されております。

J S A（財団法人日本ソフトボール協会）では、この改正された I S F ルールの中でも、大幅に修正・変更された「投球規定」に関するルールの内容を、すぐに採り入れるのではなく、世界選手権をはじめ、各種国際大会でどのように運用され、適用されているかを研究・確認し、2012年度の J S A ルールへの採用の可否について慎重に吟味・検討を重ねた結果、本年度からこの「投球規定」に関するルールを採用することになりました。

「投球規定」の内容の主な改正点としては、ルール1「定義」16項「クローホップ」の内容が大幅に書き改められ、新たに「リーピング」が「合法的な投球動作」として認められ、採用されたことが挙げられます。

「クローホップ」については、従来 J S A ルールでは、いわゆる「ツー・ステップ」として不正投球とされていたものが、正しく投手板から蹴り出し、一連の動作であれば、「フォロースルーとみなし、クローホップとはみなさない」と、その内容が大幅に「緩和」されています。

新設された「リーピング」は、従来 J S A ルールでは、「ジャンピングスロー」（投手板を蹴る勢いでジャンプし、投球する）として不正投球とされていたものが、こちらも正しく投手板から蹴り出していれば、投手の軸足と自由足を含む身体全体が空中にあっても、それは「ジャンピングスロー」ではなく、「リーピング」という合法的な投球動作であると認められました。

これに伴い、6－3項「正しい投球動作」の項目も、この改正を受け、その内容が大幅に書き換えられておりますので、その改正内容についても、下記ルールを熟読し、新たなルールへの理解を深め、正しく実践できるよう役立てていただければと思っております。

この「投球規定」の改正については、「ソフトボール競技の根本に関わる大きな問題」とであると、本協会ルール委員会はもちろん、理事会でも議論が重ねられ、「このようなルール改正はソフトボール競技本来の魅力や面白さを半減

させてしまうものではないか」「この投球動作が合法という解釈はあまりにも行き過ぎではないか」と危惧する声も多く、J S Aルールへの採用には慎重な意見もありましたが、国際的な動向として「投球規定」に関する判定基準は、大幅に「緩和」される方向で動いていることを考慮し、この度、J S Aルールへの採用を決定するに至りました。

2012 ルール改正内容

R 1 - 1 6 クローホップ CROW HOP とは、投球時、投手板以外の地面に軸足をずらして、その地点から投球することをいう。投手板から軸足をずらして（投手板から離れた地点から）投球を開始し、投手板以外の地点を蹴り出して投球すれば、これは不正投球である。

（注）投手は、投手板から蹴り出していれば、跳んで（リーピング）、着地し、一連の動作の中で投球してもよい。軸足が投手板から蹴り出され、その後に軸足が一連の動作として動き続けている場合は、フォロースルーとみなし、クローホップとはみなさない。

【ポイント】従来と解釈・適用が大きく異なる点は、「最初から軸足を投手板以外の地点にずらし、投球した場合が、「クローホップ」であり、不正投球が適用されるが、正しく投手板から蹴り出し、投球を開始すれば、軸足が前方にずれ、いわゆる「セカンドポイント」を作り、そこから改めて蹴り出しているように見えても、それが一連の動作であれば、それは「フォロースルー」とみなされ、「クローホップ」は適用されず、「正しい投球動作」として認められるというところが大きな改正のポイントとなる。

R 1 - 4 1 リーピング LEAPING とは、投球動作を開始し、投手板から蹴り出し、身体全体が空中にある状態をいう。すなわち、正しく投手板を蹴り出した後、投手の軸足と自由足の両方を含む身体全体が空中にあって、ホームプレートに向かって動き、着地して、一連の動きの中で投球を行うことである。これは合法的な投球動作である。

【ポイント】従来のJ S Aルールでは、「軸足を引きずっていけば合法」「軸足の甲が下を向いたままならば合法」との判断基準を用いていたが、このルール改正により、正しく投手板を蹴り出した後、両足が空中に浮いていても（投手板を蹴り出す勢いでジャンプしても）、これは正しい投球動作であり、不正投球は適用されない。

6 - 3 項 正しい投球動作

1. 投手はウインドミル、スリングショットなどのモーションで投球してよいが、速やか

に球を投げなければならない。

2. 投手は両手で球を持って、投球姿勢に入ったのちは、球を片手から離して前後左右に揺すったり、再び両手に戻したりしてはならない。

3. 一つの投球動作でウインドミルとスリングショットを組み合わせたり、途中で停止したり、逆回転したり、まぎらわしい投球動作をしてはならない。

4. 投手は、ウインドミルで投球するとき、腕を2回転させてはならない。

(注) ウインドミルモーションをはじめの前に、腕を横あるいは後ろに落としてもよい。このとき腕は2回腰を通過することになる。

5. 打者に対して下手投げで、手と手首が体側線を通りながら球を離さなければならない。

(注) 手は腰の下にあって、手首は肘よりも身体から遠く離れないようにしなければならない。

6. 打者に対して自由足を一步前方に踏み出すと同時に、投球をしなければならない。自由足を踏み出す範囲は、投手板の両端の前方延長線内でなければならない。

7. 投手の軸足は、前方へ引きずったり、跳んだりする前は、投手板に触れていなければならない。

(注1) 軸足は、投手板に触れたままであれば、投手板の上でスライドさせてもよい。軸足を投手板から持ち上げて、再び置き直すと不正投球となる。

(注2) 投手板から蹴り出していれば、軸足を引きずったり、跳んだりして着地し、投球することは合法的である。軸足を投手板から離し、前方へ移動させ、投手板に触れていない地点から投球すると不正投球となる。

8. 投手板から軸足をずらして(投手板から離れた地点から)投球を開始し、投手板以外の地点を蹴り出して投球すれば、これは不正投球である。(クローホップ)

(注) 投手は、投手板から蹴り出していれば跳んで(リーピング)、着地し、一連の動作の中で投球してもよい。軸足が投手板から蹴り出され、その後軸足が一連の動作として動き続けている場合は、フォロースルーとみなし、クローホップとはみなさない。

9. 投手は球を離れたのち、投球動作を続けてはならない。

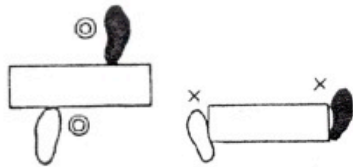
10. 投手は投球姿勢に入ったならば、打者の打撃を阻止するため故意に球を落としたり、転がしたり、弾ませたりしてはならない。

11. 投手は球を受けるか、球審がプレイの指示をしたのち、20秒以内に次の投球をしなければならない。

2012 競技者必携変更点（投球規定関連のみ）

10. 投手板の踏み方

P120（中段・中・右図） ※右投手の場合／白・自由足 黒・軸足

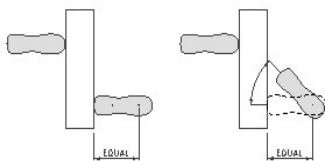


（注）自由足・軸足とも、両足が投手板に触れていれば、合法的な投手板の踏み方である。

ただし、足が投手板の側面だけに触れている場合は投手板に触れているとはみなさない。

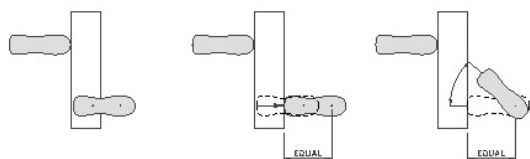
【ポイント】軸足は触れているだけでは、投手板に触れているとはみなされなかった（完全に投手板に乗せていないといけなかった。逆に自由足は側面に触れているだけでもよかったが、今回の改正で自由足、軸足ともに投手板の側面に触れているだけでは、投手板に触れているとはみなされなくなった。

P121 図1



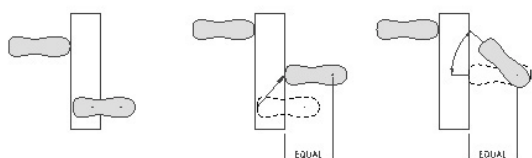
投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足のつま先の位置が投球開始時と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

P121 図2



投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足が投手板の上を前方にスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。

P121 図3



投手板に両足が触れ、正しくセットしており、軸足が投手板の上を斜めにスライドしても合法的な投球動作である。また、軸足のつま先の位置がスライドさせた地点と変わらなければ、その後の一連の投球動作の中で踵が投手板から離れても不正投球とはみなさない。